

メッセージアウトライン

創世記 2:4 ~14 「人の創造とエデンの園」

[4a] 「これは天と地が創造されたときの経緯である」

「経緯」とは原語のヘブル語で「トーレードス」ということばで、いきさつ、由来、歴史などを意味し、歴史的発展の出発点を説明し、人または物が登場したあとにどうしたかを語るための表現である。創世記にはこのことばで分けられた多くの個所が見られる。(2:4,5:1,6:9,10:1,11:10,11:27,25:12,25:19,他) すなわち創世記に登場してくるアダム、ノア、セム、テラなどの族長と呼ばれる人々が各自の生涯で起こった出来事や知り得た知識に関して各々が石板などに文書として記録し、そのようにして代々保存されていた記録が各自の「トーレードス」であり、それらを後にモーセが収集し編集したと考えられている。もちろん、そこには聖霊の働きがあったであろう。

[4b-6] 「神である主が地と天を造られたとき、地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。ただ、水が地から湧き出て、土地の全面を潤していた」

今までは「神(エロヒーム)」であったが、ここからは「神である主(ヤハウエ・エロヒーム)」ということばがたびたび使われている。エロヒームは「神」を意味する普通名詞、ヤハウエは「存在する、ある」を意味する固有名詞で日本語では「主」と訳されている。ここで二つの名が合わされているということは、ヤハウエとエロヒームが同一であることの強調のためと考えられる。また、ここでは「地と天」と語順が入れ替えられているが、これは表現の重複を避け、4節全体を統一するための用法と思われる。「灌木(シーアハ)」は 3:18 の「いばらとあざみ」を包括した表現と思われる。「野の草 (エーセブ)」は食糧となる植物のことと思われる。植物は創造の第三日目に造られている(1:11~13)ので、5節の灌木や野の草がすべての植物を意味するわけではない。「地には、まだ一本の灌木もなく…」という表現はこの場合、全世界の土地を意味するのではなく、人がこれから創造され、そこに置かれ、そこで生かされる環境としての地であろう。「神である主が地上に雨を降らせず」は 1:7 で神が造られた「大空の上の水」すなわち膨大な水蒸気の層が天空を覆っており、温室のように世界中でほぼ同じ温度が維持されており、それゆえ温度差によって空気団が移動し、高気圧や低気圧が発生して雨を降らすということはなかったのである。しかし、その代わりに「水が地から湧き出て、土地の全面を潤していた。」

これは地球が創造された時に地下に滞留した巨大な量の地下水から湧き出てきた水であっただろう。これによって植物は枯れることなく、陸の動物も渴くことはなかった。

[7] 「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった」

「土地のちり」とは地を構成している窒素、酸素、カルシウム等の基本的化学元素のことである。→「第一の人は地から出て、土で造られた者です」 I コリ

ント 15:47

神は土地のちりで人の完全なからだを形造られたがそこにはまだいのちがなかった。それで神は、その鼻にいのちの息を吹き込まれ、人は生きものとなった。(しかもそれは赤ん坊ではなく完全に成長した成人としてであった)

他の鳥類、水生生物、陸生生物は神はそのみことばによって「生きもの」として創造されたが、人の場合は「…その鼻にいのちの息を吹き込まれた」と記されている。これは人と神との密接な関係を表わす表現で、神が直接いのちの息を吹き込まれたのは人だけであった。このよう

にして神は人をご自身のかたち(1:27)として創造されたのであった。人は進化論の言うように動物の祖先からではなく、神から直接いのちの息を吹き込まれ、生きたものとなったのである。

[8-9]「神である主は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた

「エデン」は歓喜を意味することば。「東の方」は創世記の記者から見て東の方であるが、位置を特定することは困難。神はエデンの園以外のどこかで人を造られたが、人のためにこの特別な園を用意され、そこに置かれた。そこにはすでに実をつけたあらゆる種類の美しい果樹が成長していた。特に園の中央には特別な二本の木があった。「いのちの木」は人がその実を食べるならば永遠に生きることができる木であった。→3:22 それがどのようなものであったかはわからないが新天新地を描写している黙示録 22:2 にも記されている。「善悪の知識の木」もどのようなものであったかは不明であるが文字どおりの木であったことは確かであり、人がその実を食べる時に善悪を知る者となり、神との交わりを断絶と死をもたらすものとなるのである。→2:17 しかしこれは実自体がそのような変化をもたらすものではない。

[10-14]「一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れる。そこには金があった。その地の金は、良質で、また、そこにはベドラハとしまめのうもあった。第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れる。第三の川の名はティグリス。それはアシュルの東を流れる。第四の川、それはユーフラテスである」

ハビラの地は良質な金やしまめのうとベドラハ(マナに似た食べ物と思われる)に富み、エデンを流れる四つの川はピション、ギホン、ティグリス、ユーフラテスと名づけられた。しかし、覚えておかなければならないことは、これらの川や地域はノアの洪水前の地理学上のもので、現在の地理に当てはめることはできない。ノアの時代の全世界を覆った洪水(創世記 6~8 章)によって地形や地理は完全に変わってしまっている。そして洪水後の人々が洪水で生き残ったノアの子孫が記憶していた地名や川の名にもとづいて今日のメソポタミア地方にある二つの川にティグリス、ユーフラテスと名づけたのであろう。

神は天地万物を創造され、人を造られ、地に増え広がること、地を従え、すべての生き物を支配することを命じられた。→1:28 この2章においては、神による人の創造の詳述と人の住む理想的な環境の描写がなされている。人はそこ

で神との交わりのうちに喜びと平安を持って生きることができた。しかし、その後の人の歴史を見る時にそのようにはなっていないことを私たちは知る。これは、人が神の戒めを破ったことによる神との断絶と死とのろいの結果である。

→創世記3章

自由意思を与えられた人はロボットのようにではなく、その意思をもって神との関係を築いていく責任がある。しかるに人は正しい選択をしなかった。私たちはこの神に立ち返る必要があるのである。→ローマ 6:23